
北海道大学総合博物館

ボランティア ニュース

長尾巧先生小伝 抜粋特別号

(ボランティアニュース No. 13~16 から抜粋編集)

特別寄稿

ネスパ?の長尾先生 ①

北大名誉教授・総合博物館資料部研究員 加藤 誠

北大の総合博物館には、貴重な標本が沢山保管されています。化石の標本の中では、大きさといい、知名度といい、最高級であるのは、デスモチルスとニッポノザウルスの2つの標本でありましょう。この両方とも、故長尾^{たくみ}巧教授の研究になるものです。昭和天皇が北大に行幸された折、長尾先生は、デスモチルスについて、天皇陛下に説明されたと聞いています。

北大の理学部は1930(昭和5)年に出来ました。長尾先生は、その地質学鉱物学科の地史学および古生物学講座の初代教授でありました。福岡県田川のご出身で、1891(明治24)年3月9日に生まれ、東京高等師範を卒業後、山口県岩国中学や鹿児島師範の教師を経て東北大学に入り、故矢部長克教授に師事、1921年、理学部地質学科を卒業と同時に講師になりました。1927年から2年間、フランスで在外研究に従事し、この間に理学博士の学位を受け助教授に昇進。1930年、北大理学部創設とともに、教授として札幌に赴任されました。それは血気盛んな30代であったことになります。他の新任教授連も皆若かったそうです。

長尾先生を有名にしたのは、北九州の炭田地質の研究です。石炭とそれを挟む地層が、何時、どのような場所で形作られたか? それは、石炭層の出来た海岸の湿地のようなところを中心に、貝を含んだ海が何度も出たり入ったりを繰り返した状況を明らかにしたことであったのです。これは古第三紀の地層の研究としては出色のもので、日本



長尾巧先生(1891~1943)(1936年45歳頃)

の堆積相解析研究の始まりとなる仕事だったので。この研究は、地学雑誌に何回にもわたって連載され、「大菩薩峠」とあだ名されました。当時有名だった中里介山という作家の長編時代小説「大菩薩峠」からの連想でした。

長尾先生は高師時代は博物学科で、佐藤伝蔵先生に習われて、地質学に興味をもたれたようです。当時帝国大学へは、高等学校出身者しか入学出来ませんでした。高校は正統派であって、その他は傍系と呼ばれていました。高等師範学校や、高等工業学校出身者や、女性には門戸が閉じられていたのです。これを破ったのは、東北大学と北海道大学でした。大正から昭和の初めにかけてのことですが、当時の学生には、こんな事情もあって年

輩者が多かったのです。私の父は東北大学ですが、このような経歴の一人です。入学当初から、地質学について、かなりの経験も知識も持っており、何より強い勉学の意志の持ち主でした。

長尾先生は、はじめ鉱床学を志されたようです。しかし恐らく出身地が大炭田地帯であったことにもよることでしょうが、後に炭田地質を専攻され

ることとなりました。もっとも、あまり化石のことは興味がなかったそうですから面白いものです。しかし調査の途次、沢山産出する貝化石を扱うことになり、これが地質年代や、地層の堆積環境の指標として有用であったのです。

(ボランティアニュース No. 13, 2009. 6)

特別寄稿

ネスパ?の長尾先生 ②

北大名誉教授・総合博物館資料部研究員 加藤 誠

北大に理学部が出来ることになった折、教授候補の一人として、長尾先生に白羽の矢が立ちました。北海道は北九州とならぶ大炭田地域ですから、炭田地質のエキスパートとなった長尾先生のキャリアが、この人選に働いていたのかも知れません。

当時の慣行にしたがって、教授候補者は1~2年海外で研究、視察を行うことになり、長尾先生はフランスに渡りました。そしてパリに落ち着かれました。

新生代古第三紀の時代区分のひとつにルテシアンというのがあります。これはパリの古名ルテーによっています。シーザー率いるローマ軍がガリヤ(フランスの古名)を征服したとき、ルテーはじめじめとした低湿地で、地名自身がこれを意味しています。パリの盆地は、古第三紀の地層や化石が良く研究された所で、長尾先生もこれらの研究を大いに参考にされた筈です。ルテシアンの標準地パリに行かれたのは大いに意味のあることでした。決して花のパリにあこがれたわけではなかったことは確かでありましょう。パリには有名なソルボンヌ大学がありますし、古くからの鉱山学校、エコール・ド・ミンがあります。北海道を始めて組織的に地質調査をしたアメリカ人、ベンジャミン・ライマンは、このエコール・ド・ミンに学びました。ジャルダン・ド・プランの端にある巨大な自然史博物館は、博物学者ビュホンの名を冠した通りに面していて、キュビエ、ラマルク、プロニヤール、ドービニーら高名な学者達の古くから

の大量の化石コレクションを所蔵しており、長尾先生が勉強なさるのに、研究場所には事欠かなかった筈です。北大総合博物館の登録化石標本の台帳を見ますと、はじめのところに、フランスをはじめとする欧州産化石が多く記されていますが、これは長尾先生が、古生物学の授業用、比較研究用に、フランスの標本商から化石を購入なさったからであります。ちなみに東大や京大の地質学教室の標本はドイツの標本商から購入したものでした。

パリの長尾先生の所には、立ち寄ってお世話になった人も少なくなかったようです。美食家とは思われない長尾先生も、エスカルゴ(カタツムリ料理)を召し上がったそうですが、これはお客さんへのおもてなしの一環だったのでしょうか。

1929年4月27と28日の2日間、当時ヨーロッパに滞在中だった北大理学部教授候補者がパリに集まって会議を開きました。主に理学部の規定や、予算について話し合われたのですが、後世パリ会議と称されているものがこれです。参加者は13人、後の東大総長となった茅 誠司(物理学科)、北大学長杉野目晴貞(化学科)、雪の研究の中谷宇吉郎(物理学科)、地質学鉱物学科からは、後に学士院会員となった鈴木 醇、原田準平、長尾 巧が参加しています。会議はリュクサンブール公園近くのレストランで行われたそうですが、このとき公園で撮った集合写真が残っています。数学の功力金二郎氏はパリ在住でしたが、病気で、この会に



パリ会議での記念写真。1929年4月ルクサンプール公園にて。
前列右から2番目が長尾先生（北大理学部五十年史から）

は出られませんでした。会議のお世話は、パリの長尾先生がなされたもので、このとき先生は、もうすでにかなりフランス語がお出来になっていたようです。

交渉は、長尾先生の連発するネスパ？でスムーズに進んだのでした。ネスパ？はフランス語の会話では、しきりに使われる言い回しで「そうじゃありませんか？ そうですね？」などに当たる言葉です。英語ならイズンティット？、ドイツ語で

すとニヒトバーといった言い方が相当しますが、日本語の「……、ね」という言い回しが雰囲気的に正にネスパ？に相当しそうです。ネスパ？がスムーズな会話を助けていたからには、長尾先生のフランス語は、なかなか大したものだったに違いありません。ネスパ？

(ボランティアニュース No. 14, 2009. 9)

特別寄稿

ネスパ？の長尾先生 ③

北大名譽教授・総合博物館資料部研究員 加藤 誠

北大教授に就任された長尾先生は、はじめは日本各地の中・新生代化石を研究されました。貝化石の他に、アンモナイトの顎器や、十脚類の甲殻類も記載されました。そして、道内各地を広く踏査されました。後に長尾先生の助手となった故湊正雄先生から聞いたところでは、長尾先生について角田以外の全炭鉱に入られたそうです。その中で、北大理学部地質学鉱物学科の第1回の卒業生、大立目謙一郎氏、斉藤林次氏を指導され、石狩炭田のクリッペの存在と、それを生じさせた構造運動を明らかにされたのでした。大立目さんは秋田大学に、斉藤さんは、のち熊本大学に行かれまし

た。長尾先生は、大立目さんに、人間は一芸に通ずることが肝要で、多芸は良くないと仰言ったそうです。しかし、そうも言ってはおられなくなりました。先生のもとにカラフト(サハリン)産の大きな化石が持ち込まれました。調べてみると、これは、アメリカ原産のデスモスチルスという哺乳動物の頭骨であると判明しました。しかも何と、カラフトの現地には、さらに胴体部分の骨化石が残っている模様なのです。デスモスチルスは特異な臼歯で知られた化石で、頭骨や、その他の体部分分は、それまで知られていなかったものですから、長尾先生はとても興奮なされたことでしょう。直



発掘地点付近の造林小屋(?)にて。右から、大石三郎助教授、長尾 巧教授、橋本 亘氏(東北大学学生)、増子新太郎氏(理学部石工室)



デスモステルス化石骨格標本(体長約 2.8m) (北大総合博物館)

ちに費用を調達して、1933(昭和 8)年助教授の大石三郎先生を同道、カラフトの気屯に発掘に赴かれることになりました。これには、当時東北大学の学生だった橋本 亘氏も同行し、彼の撮影したムービーフィルムが今も残っています。化石は、初雪沢という所に設けられた、木材流送用の木造ダムのすぐ下流の大きなノジュール(団塊)の中がありました。前年の出水で、ノジュールの位置が動いていて、なかなか見つからなかったそうですが、調査・発掘予定時期の終わり近くに幸運にも探し当てることが出来ました。巨大な岩塊を川から引き上げるにはウインチを用い、大変な作業だった

ようです。化石を含む岩塊は、無事北大まで搬送され、長尾先生は、石工さん(増子さん)の助力のもと、化石骨を岩塊から取り出すことが出来ました。骨は、期待通り、細部にわたるまで保存されており、それまでは無脊椎動物化石しか取り扱ったことのなかった長尾先生は、ついに脊椎動物化石の研究にとりかかることになったのでした。

取り出された骨格は、口吻の部分に若干の欠損がある外は殆ど完全に揃っており、折り曲げた鉄製の支柱の上に並べられ、全体として一見カバのような姿で復元されました。復元には、北大近くの標本商、信田さんと相談されながらあたられた

ということです。熊野純男さん(元理学部講師)が、若い頃、汗水をたらしながら鉄骨の間をかいくぐって復元の手伝いをされたのでした。ここまでの作業は、大急ぎでなされ、1936(昭和11)年に北海道で行なわれた陸軍特別大演習の際、北大に行幸された昭和天皇にご進講という運びになったことは前述のとおりです。がちりと四足を踏ん張り、胸板をもった骨格で、デスモスチルス・ミラビリスと命名されました。ミラビリスは素晴らしいといった意味で、パリで長尾先生に案内された原田準平先生は、デスモスチルス・ミリャビックス(見りゃびっくりす)とあだ名しました。この発見・復元によってデスモスチルスは立派な胸板と頑丈な四肢をもっていることが明らかになりました

た。この世界最初の全身復元骨格は、地質学鉱物学科の看板となって、長く標本室の中央に置かれていました。

ただ長尾先生自身は、デスモスチルスの研究を完成するまでには至らず終わりました。戦後、学士院会員の矢部長克先生(長尾先生の先生)を長とするデスモスチルス研究委員会が発足し、頭骨については、井尻正二・亀井節夫両氏によって、体躯の部分の記載は鹿間時夫・高井冬二両氏らによって研究され、論文が発表されています。全体の復元についてはその後も、亀井氏、犬塚則久氏らによって研究が続けられました。

(ボランティアニュース No. 15, 2009. 12)

特別寄稿

ネスパ?の長尾先生④

北大名誉教授・総合博物館資料部研究員 加藤 誠

何でも物事は続くものと見えます。デスモスチルスの研究のさなか、今度は、カラフトの中生代白亜紀の地層から恐竜化石が見つかりました。デスモスチルスは新生代中新世の生物でしたから、一挙に一億年近くもさかのぼった化石が登場してきたわけです。カラフトの南半分は当時日本領で、日本では恐竜化石はそれまで見つかったことはなかったもので、これはニッポノザウルス(日本竜)と名づけられました。ニッポノザウルス・サハリネンシス(カラフト産の日本竜の意)と呼ばれたのです。ニッポノザウルスは、ハドロザウルスに似た草食の恐竜です。はじめに得られた化石は、かなり骨が揃っていたものの、前足の部分が出ていませんでしたので、教室の人々には、“手が出ない”と冷やかされたそうです。長尾先生は、まともや、すぐに発掘に出向かれ、残っていた前足の部分を採取されました。これで“手が出せる”と仰言ったそうで、なかなか茶目っ気もある人だったのですね。この研究は、最近まで日本産恐竜の研究論文としては唯一のものでありました。

長尾先生は謹厳実直の士という印象がありまし

て、ネスパ?とはすぐ結びつかない感じがあります。剣道3段で、宝生流の謡曲を趣味とする方でした。几帳面な性格で、お部屋はいつもキチンと整理されていたそうです。講義も原稿を作り、掛け図や標本などを準備して丁寧になさり、謡で鍛えた音声で朗々と話されたと聞いています。前に書いた大立目、斉藤さんの他に、カラフト地質調査を通じて藤岡一男さん(のち秋田大学教授)も指導されました。北大で最後の頃の弟子に、湊正雄さんがいます。なお、藤岡、湊さんはフィールドでの長尾先生の姿を書いておられますが、とても早足で元気な方だったそうです。

先年亡くなった学士院会員、松本達郎氏との共著の白亜紀イノセラムスの研究も、長尾先生の有名な仕事で、ベースとなった標本は、北大博物館の宝です。

長尾先生は1941(昭和16)年、東北大学に新設された東亜地質学の教授として母校に戻られました。福岡出身の長尾先生は、東京高師、仙台の東北大、ついで北大へと移られたので、次はもっと北のカラフトか?と仰言っておられたそうです



ニッポノザウルス化石骨格標本(体長約 4.1m) (北大総合博物館)

が、南下して仙台に往かれたのでした。しかし、不幸、病を得られ、胃がんで 1943 年 8 月 28 日にお亡くなりになりました。52 歳でした。

北大での昼時には、先生方は店屋物をとって会食をなさるのが恒例だったようですが、長尾先生は、夏にはひやむぎ、冬は大谷屋の鍋焼きうどんと決まっていて、決して変わらなかったというのですから、おどろきです。

長尾先生については、私の恩師、湊 正雄先生と熊野純男さん(元理学部講師)からお話を伺っておりました。熊野さんは、生前の長尾先生を知る数

少ない人です。また、箕浦名知男さん(元博物館助教授)は、長尾先生に関する資料を集めてくださいました。川村信人さん(理学部准教授)は、長尾先生について学会で報告されたことがあります。

ご家庭ではやさしい父親、教室では親切な教師、営々とたゆみなく精進する研究者、豊かな趣味人であった長尾先生は、万人に敬われ、慕われる、我々にとって理想の人物像に合致するように思われるのです。ネスパ? (完)

(ボランティアニュース No. 16, 2010. 2)

加藤 誠 氏 紹 介

1932(昭和 7)年宮城県に生まれ、金沢で育つ。金沢大学で地質学を学び、総理府勤務をへて、1956 年北海道大学大学院理学研究科に入学、早坂一郎教授・湊 正雄教授のもとで古生代サンゴ化石を研究。大学院博士課程在学中に英国留学。1961 年北大理学部助手。1995 年退官。現在北大名誉教授、北大総合博物館資料部研究員。古生代研究のほか、第四紀学や地盤災害など応用地質学にも関わり多くの研究者・技術者を育成。日本古生物学会学術賞(1970 年)、日本地質学会論文賞(1988 年)受賞。学会、文部省、日本学術会議をはじめ、国際古生物学協会、国際地質学連合などの委員を歴任。

ボランティアニュース
長尾巧先生小伝 抜粋特別号
(ボランティアニュース No.13~16 から抜粋編集)

- ◆編集・発行：北海道大学総合博物館ボランティアの会 (編集委員：石川、沼田、星野、永山、山岸、児玉)
- ◆発行日：2013 年 10 月 1 日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目 Tel: 011-706-4706
- ◆ボランティアニュースは、博物館のホームページからもご覧いただけます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>